

4. 農 業

垂水は前に錦江湾、後ろに高隈山が迫って耕地が少なく、農業を営むには条件の悪い土地ながら、このことを逆手にとって協和の先人たちは努力や辛抱を重ねて農業に従事してきました。

協和地区では米はもちろん、甘藷^{かんしょ}、煙草^{たばこ}、サトウキビ、蜜柑^{みかん}、びわなど水利や地質、地形に合わせて先進的な農業が営まれてきました。

キヌサヤエンドウは今や誰も知らない人はいませんが、昭和の初期に中俣^{すえ た あさいち}において導入したのが末田浅一でした。キヌサヤエンドウを蜜柑の間作として農家に勧め、戦前戦後にかけて、垂水をキヌサヤエンドウの一大生産地としての基礎を築き上げました。末田浅一の功績を後世に伝えるために本城橋の南側に顕彰碑が建てられています。



キヌサヤエンドウ

畜産については明治のころまで牛馬は主に農作業用として利用されていました。大正期に入ると、農家の副業として、またその糞尿を堆肥源として牛、豚、鶏の飼育が奨励されますが、協和地区もその例外ではありませんでした。

肥育牛については大正の始め、1910年代に中俣^{さいはらきん じろう}の才原金次郎は自家飼育はもちろん、農家に対して子牛を預け、成牛に育てたのち買い取るという肥育牛模合^{もあいせいど}制度を設け、農家の現金収入の道を開いたのです。その後牛の頭数は急激に増加していきました。才原金次郎^{けんしろうひ}の顕彰碑は地元の脇田一集落の南側の国道沿いに建立されています。

現在、垂水市のキヌサヤエンドウ、インゲン豆^{いちよく}は日本一の出荷量を誇り、協和地区の農業はその一翼を担っています。桜島の降灰被害はあるものの、これからもキヌサヤエンドウ、インゲン豆、ビワなどの基幹作物はもちろん、ビニールハウスによるキュウリ、トマト、さらに玉ねぎやニンニクなども協和地区の特産品となるように努力を積み重ねていく必要があります。協和地区では農業の後継者不足をどうするかも大きな課題です。さらに地区内には耕作放棄地も目立ってきており、年々減少している自給率の低下も懸念されていることから、家庭菜園で野菜などを栽培するなど身近かな取り組みも必要です。